

特集 1 古注釈研究の新たな可能性を探る

第一集
目次

古注釈研究の意義 伊井春樹 2

藤原伊行の『源氏物語』の注釈的発想 渋谷栄一 7

本文の傍らに／或いは本文となつて 加藤昌嘉 13

「遅れてきた姫君」の系譜——慶福院花屋玉栄の場合—— ゲイ・ローリー 21

抄と講釈——古典講釈における「義理」「得心」をめぐる—— 海野圭介 26

間(インター)テキストとしての古注釈と『源氏物語』研究 高橋 亨 35

* *

『伊勢物語』と『源氏物語』をつなぐ古注釈

——的はずれにみえる注記のみなおし—— 陣野英則 40

平安文学の古注釈と受容

特集 2 『源氏物語』古注釈の展開
——兼良から宗祇・肖柏へ——

肥前嶋原松平文庫蔵 『源注』 解題 横溝 博 55

肥前嶋原松平文庫蔵 『源注』 翻刻 69

編 集 横溝 博

翻刻担当 中西智子 有馬義貴 門澤功成

山中悠希 陣野英則 早稲田大学古注の会

特集 3 物語文学の多様な享受

和学者たちの物語研究

——物語目録の作成と

『風葉和歌集』享受を中心に—— 小川陽子 107

『河海抄』の和と漢

——『源氏物語』の世界を読み解く—— 金 孝淑 124

『紫史吟評』の『源氏物語』受容

——古註釈・松平定信の

解釈との関連—— 岡部明日香 145

ヨーロッパがはじめて

『源氏物語』に出会ったとき

——末松謙澄訳 Genji Monogatari の
英字新聞書評の紹介をめぐる——

レベッカ・クレメンツ 178 (1)

論集創刊にあたって……iv
執筆者紹介……180
あとがき……179

古注釈研究の意義

伊 井 春 樹

一 千年の重み

源氏物語研究の始発についてしばしば言及されるのは、「此物語ひろくひろき（寛弘）年のほどよりいできにけり、しかれども世にもてなすことは、すべらぎのかしこき御代にはやすくやはらげる（康和）時よりひろまり、くだれるたゞ人のなかにしては、宮内少輔が釈よりぞあらはれける」（『弘安源氏論義』）のことばで、作品が成立したのは寛弘の年、一般に読まれるようになったのは堀河天皇の康和年間、注釈としては世尊寺伊行の『源氏釈』が嚆矢、とする指摘であろう。敦成親王の五十日の祝宴において、公任が「あなかしこ、このわたりにわかむらさきやさぶらふ」と紫式部を求めて訪れたのは寛弘五年（一〇〇八）十一月一日、すでに源氏物語は一部かすべてかとはともかく成立していたはずで、それから今日まで千年の時を刻んでいるのは確かである。孝標女のような例はあったにしても、もっぱら宮中の世界で読まれていた作品が、広く読者の目に触れるようになったのは康和（一〇九九～一一〇三）になってというので、成立して百年は経過している。『源氏釈』の出現は明らかではないが、伊行の

没年が安元元年（一一七五）とされるので、それ以前にはまとめられていたことになる。

注釈書が生まれるというのは、該当する作品が〈古典〉として世間的に認知されていたからにはかならずなく、それを求める需要層が形成されたことを示す。『源氏釈』がもつとも古い注釈書なのかどうかはともかく、平家全盛時代に源氏物語を読む風土が醸成され、平安貴族文化への憧憬と回帰が背景として作用したはずである。清盛女の建礼門院徳子が、花園左大臣有仁とか太政大臣伊通などが詞書の筆者となった二十卷本源氏物語絵巻を所持していたのも、この時代は〈源氏文化〉が生み出されていたことを示す。

伊行が亡くなって五十年後の嘉祿元年（一二二五）、定家の青表紙本が書写され、それにともない『奥入』もまとめられているだけに、河内家ともあいまって本格的な注釈作業が家々の学問として確立していくようになる。それから江戸末までの七百年余、源氏物語を理解しようとさまざまな注釈書を初め、ダイジェスト版、入門書、系図等が生み出されていった。その数は今のところ私の知っているところでは五百二十五点、まだ未発見の資料もあるはずで、予測としては六百点ばかりになるのではないかとも思っている。そのような大量の注釈書の存在を、昭和初期になつて『湖月抄』までを〈古注〉、国学の勃興以降は〈新注〉と称せられてきた。確かに違いがあり、文献の扱いでも異なりがあるとはいえ、江戸期を通じて中世から近世初期の成果も色濃く継承しているだけに、伊勢物語の注釈史のように分類するのは適当ではなく、明治期以前はすべて〈古注〉と一括りにしてもよいのではないかと私は思っている。

二 注釈の資料性

源氏物語の長い注釈史において、『湖月抄』がエポックメイキング的な存在であるのは疑いようがなく、旧説を継承しながらも新たな説を加えるという肥大化していく方法は、これによって大きな転換期を迎える。それをさらに推進したのが、文献を正確に解釈していった国学の発生で、儒教的な考えを底流に持ちながら、旧弊にとらわれ